

紀仙覺が萬葉の抄などを見るに、そのほどまでは、國々の風土記も大かたそなはりて、傳はれりと見えたたり。○中又風土記は、いとたふとき物なるに、今はたゞ出雲一國のみ、またくてはのこりて、ほかはみな絶ぬるば、かへすべくもくちをし、さるは應仁よりこなた、うちつゝきたるみやこのみだれに、ふるき書ども、みなやげうせ、あるはちりばひうせぬるなるべし。○中かくて風土記も、今の世にもかれこれとあるは、はじめの奈良の御代のにはあらず、やゝ後の物にて、そのさま舌きとはいたくかばかりて、大かたおかしからぬものなり、其中に豊後國のは、奈良のなれど、たゞいさゝかのこりて全からず、そもそもかくはじめのよきはたえて、後のわろきがのこれるは、いかなるゆゑにかと思ふに、これはた世人の心おしなべてからざまにのみなれるから、ふるぐでからめかぬをば好まず、後のいささかもからざまに近きをよろこべる故なるべし。○中さて玄かもとの風土記はみな絶ぬる中に、國はしも多かるに、出雲ののこれることは、まがことの申のいみじきさきはひなり。○下略

〔秦山集雜著甲乙錄一〕六十六國風土記今亡矣是神慮乎、地理之志詳盡國之禍也。若大明一統志適爲戎狄入京之資、今於長崎禁日本之圖、恐使外國知我境也。風土記今存、則其損益、豈相半而已哉、恐徒自禍耳。

〔印本國郡沿革考總說〕文政口年始開局於昌平鑿、編輯諸國地誌。

〔地誌解題序〕國家之治、二百餘年、文物日盛、操觚之士競起、上自經藝史策、下至天文曆數農圃醫卜、無所不有、獨至輿地風土之記、未有成書也。家君蓋有慨於斯、乃建議謀編輯之舉、因先蒐羅各州地誌、以備其用、凡累數百種、卷冊浩繁、頗苦點檢焉、曩歲私與鳥取支封冠山老侯定常池田謀、侯乃詳錄其卷帙多少、撰人名氏、且爲之辨正僞、校異同、品題其得失、業僅卒而書續出、不暇給會編輯之舉起、因屬間宮考叔、旁亦爲之續補、書成、分爲四門、曰總記、曰別記、曰游記、曰異國記、合二十八卷、附錄一卷、名曰地誌。